

39 聖愛と俗愛

地上のヴィーナスを絵画史上初めて描いた画家

2020

真鍋友範



《聖愛と俗愛》 118×279 1514 ティツィアーノ ボルゲーゼ美術館 ローマ

1 由来

キャンバスに油彩画。サイズは、118×279センチ。

ジョルジョーネの弟子であったティツィアーノが、ベネチア貴族の結婚記念画として描いたとされる由来の作品。

ルネサンスにおいて、貴族が家族史の区画となる場面で記念となる絵画を画家に依頼するあるいは贈呈することは、ごく普通の習慣であった。

当時、ティツィアーノはジョルジョーネの後継画家として、その能力を高く評価されていたことに疑いようもない。

ティツィアーノが工房において師匠ジョルジョーネから学んだ表現技術に加え、ティツィアーノらしさが表現されたのが、この作品なのだ。

2 内容

描かれているのは、衣服を身にまとった地上界のヴィーナス、裸婦である天上界のヴィーナス、そして両者の間に位置する天使。

まず、デッサンが多少破綻している点に気づくだろう。中央の水槽の上面の表現だ。【上面のこちら側の縁と向こう側の縁が水平につながっていない】。

向こう側の上面の縁が一段高く見えているのだ。

つまり、ティツィアーノは水槽を実際には見ないでイメージとして水槽を描いている。

次に気づくのは、【地上のヴィーナスを描く】という、生前のジョルジョーネは描かなかった【ティツィアーノ独特の描き方】だ。



ヒダに注目



《聖愛と俗愛》 1514 ティツィアーノ 《テンペスタ・嵐》 1508 ジョルジョーネ

ティツィアーノは、後に《ウルビーノのヴィーナス》1538において地上のヴィーナスを描いた。しかし、その【地上のヴィーナスは衣服をつけていない裸婦のヴィーナス】であった。

つまり、1514年の段階で、ティツィアーノは【衣服をまとった地上のヴィーナスを描くという新しい描画概念】を確立していたことになる。

これは【師匠のジョルジョーネが生前には実践しなかった新しい描画概念】であったのだ。



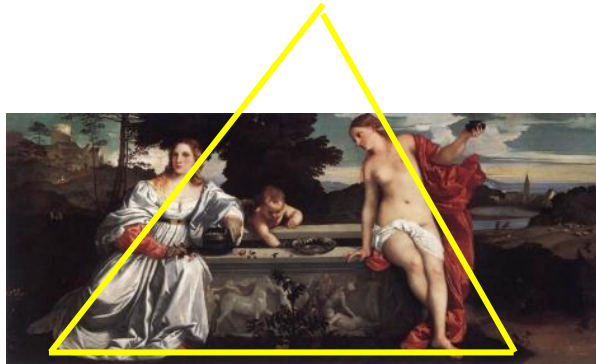
《ウルビーノのヴィーナス》 1538 ティツィアーノ

ティツィアーノの描き方として特徴的なのは、【衣服のヒダの描き方が師匠ジョルジョーネより活性感のある構造で、しかも精緻に描かれている】点だ。

人物表現には、【テーマ性を強調するというティツィアーノの描画才能】の一端がよく表れている。

ティツィアーノには、《巖窟の聖母》ルーブル版を描いたレオナルドを超えられなかった弟子たちに比べてみても、師匠ジョルジョーネを超える優れた才能を持った弟子であったことは確かだろう。

3 構図の魅力



《聖愛と俗愛》 1514 ティツィアーノ

構図の基本は、左右対称、三角構図だ。極めて安定感のある構図だ。

4 色彩と光の魅力



《聖愛と俗愛》 1514 ティツィアーノ

ティツィアーノの才能がよく表れている点の一つは、色彩構成のバランス感覚の才能だ。

つまり、明度・彩度のバランス指標である【バルール¹の統一感が実現できている】のだ。

これまでのルネサンス絵画からの進展した部分の一つは、光の扱い方だ。ティツィアーノは、登場している人物に光を当て、【絵画テーマを強い光で強調している】点だ。前景の水槽も含め、背景はあえて光を控えめに扱い、表現上の強弱差をつけている画面だ。

5 前景の特徴



《聖愛と俗愛》 1514 ティツィアーノ

当時はまだ、バロック時代にカラヴァッジョの行った明暗法の強調した絵画には至ってない時期であったものの、【強調すべき対象にスポットを当てた描き方】の絵画になっている。

この、【中心テーマとなる描画対象に強いスポット光を当てる】という技法には、前例となるレオナルドの《岩窟の聖母・ロンドン版》が挙げられる。



《岩窟の聖母・ロンドン版》 1483-1508 レオナルド・ダ・ヴィンチ

* 岩窟内に差し込む強いスポット光によって、登場人物を浮き上がらせている。

¹ 色価ともいう。明暗と位置関係の対応、および位置関係の指示の程度 ウィキペディアより

6 背景の特徴



《聖愛と俗愛》 1514 ティツィアーノ

* 二本のレッドラインは画家の目の高さを示す位置だ。
通常の画面では水平線位置の相違は生じない。



* 推定される左側上部の水平線（視点の高さ）の位置（レッドの線）

まず、背景の叙情的な要素を演出する情景に注目したい。

この抒情的要素の演出にこだわっていたのは、師匠ジョルジョーネだった。

ティツィアーノの描いたこの作品でも同じように。師匠の技法が受け継がれている。

右側の天上界のヴィーナスの背景には、狩の様子が描かれ、季節は秋だ。左側の地上界では、野うさぎや、騎馬で疾走する人物や別荘らしき邸宅が描かれている。季節は春だろう。

この【二つの異なった季節を同時に一枚の画面に描く技法】もまた、【師匠ジョルジョーネ由来の技法】だ。

つまり、ジョルジョーネは、絵画分野における【理念と視覚の一体化表現】に

よって、彫刻にはできない絵画の可能性を大きく拡大することに貢献した画家であったのだ。

ジョルジョーネの場合は、その実践として、【異なる地点を同時に一枚の画面に描く技法】²でかの有名な《テンペスタ・嵐》を作成している。



《テンペスタ・嵐》1508 ジョルジョーネ

- * 兵士とヴィーナス親子は遠く離れた地点にいるが、同じ場面に描かれている。
- * 当然のこととして、兵士からヴィーナス親子は見えていない。だが、互いに離れた地点から、同時に稲妻の光を見、稲妻の音を聞いている。

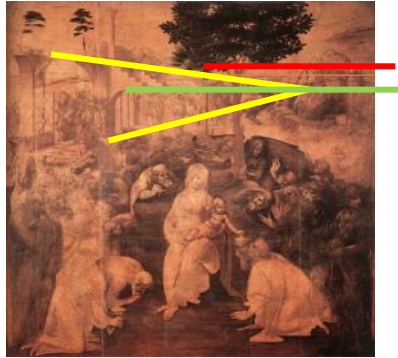
どうやら、この《聖愛と俗愛》においても、【師匠ジョルジョーネの技法と同じく、画面合成がある】ことが暗示されているのだ。

実際、【画面の左右で、微妙に水平線の位置にズレがある】。水平線は、画面上の遠近を表す線の消失点の位置に関係する。

だから、この画面が一続きの画面なら、本来なら、この矛盾があってはならないのだ。

かつて、この誤りが原因の一つで描画を中断したと考えられるレオナルドの作品例がある。（支払いのトラブルという説もある。）

² 参考5 ラ・テンペスタ ラ・テンペスタは何を描いた絵画なのか 2018 真鍋友範 (ウェブ論文)



《東方三賢王の礼拝》 1481 レオナルド・ダ・ヴィンチ
 * 水平線の位置に矛盾がある。(レッドとグリーンライン)

《東方三賢王の礼拝》では、【建物の遠近法の消失点が、描く人の目の位置を示す線と水平線が一致しない】。

その為、構図が破綻し、まとまりのない画面になっているのだ。

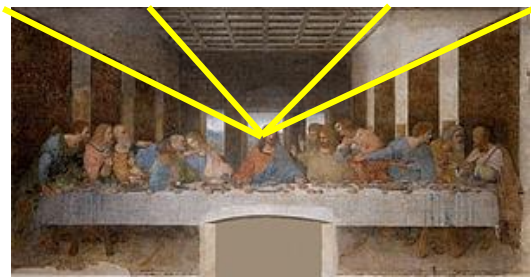
しかし、この失敗を通して構図問題に目覚めたレオナルドは、その後《最後の晩餐》や《岩窟の聖母・ロンドン版》の2作品を通して、【視線誘導の実験絵画】を完成させ、構図問題を克服している。³

レオナルドの場合は、単純に【一場面の完璧な表現に関心があり、画面合成の意図はない】。これはジョルジョーネの目指した表現と大きくなる異なる部分だ。



《岩窟の聖母・ロンドン版》 1483-1508

* 【頭部中心軸線と視線による視線誘導】



《最後の晩餐》 1498

* 【遠近法による視線誘導】

* 両作品とも、イエスに視線が誘導されるように工夫されている。

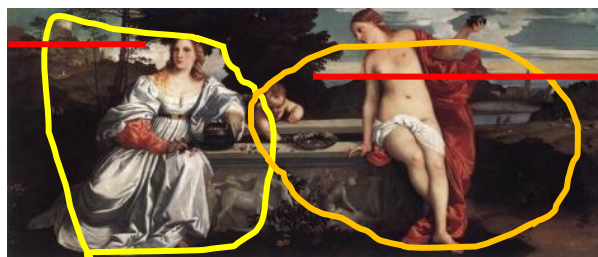
では、ティツィアーノの場合、この水平線位置の矛盾に意味はあるのだろうか

³ 参考 二枚の岩窟の聖母 秘められた表現と新制作順仮説 2017 真鍋友範 (ウェブ論文)

か。

この【矛盾した水平線の存在】には、師匠ジョルジョーネから継承された【観者に伝える画面合成サイン】が存在するのだ。

7 画面合成の秘密



《聖愛と俗愛》 1514 ティツィアーノ

* 矛盾する水平線は、二つの画面の合成であることを暗示している。

結論から先に緯線が述べると、【ティツィアーノは、師匠ジョルジョーネの画面合成技法を受け継いでいる】。

その理由は、こうだ。

一つ例を挙げると、ジョルジョーネ工房で師匠ジョルジョーネが描いた《テンペスタ・嵐》の中で用いたメッセージと同様な、【画面合成】サインなのだ。



《テンペスタ・嵐》1508 ジョルジョーネ

* ヴィーナスを兵士の約1、2倍に大きく描くことで、合成画面であることを暗示している。

* テンペスタは、これら三つの画面合成からストーリーが成立している。

つまり、この【水平線のズレ】は、《テンペスタ・嵐》でさりげなく示された【人物スケールの矛盾によって合成画面であることを示している】のと同様に、【合成画面から構成されたストーリーを持つ絵画というメッセージ】なのだ。

8 ストーリー



《聖愛と俗愛》 1514 ティツィアーノ

では、二つの合成画面によって構成されるストーリーをイメージしたい。

ストーリーは、結婚への祝福のメッセージとして構成されている。

左手に香炉を持った天上界のヴィーナスは、衣服をまとった地上界のヴィーナスを祝福している。一方の地上界のビーナスは、貴族の結婚相手の妻となる女性をモデルとしてイメージし、貴婦人の姿で描かれている。

【この衣服をまとった貴婦人が示す地上での世俗愛が、中央の天使が水槽の水をかき回す身体動作によって、天上界の聖なる愛と完全一体化し究極の至上の愛となること、を願って描かれている。】

つまり、【最高の愛を祈念した、贈り物である結婚祝福画なのだ。】

9 継承と革新



《聖愛と俗愛》 1514 ティツィアーノ

ティツィアーノは、師匠ジョルジョーネから学んだ画面合成という技法と、天上界のヴィーナスを描くという、師匠ジョルジョーネの描画方法と内容を継承することに加え、【地上界のヴィーナスと天上界のヴィーナスを同画面上に描く】という、【当時最新の描画内容に挑戦した革新的な画家だった】のだ。

また、ティツィアーノは、ジョルジョーネの残した絵画史上の成果を、まるでジョルジョーネ個人が生きていて描画発展させたかのように自身の技法として継承表現した画家と言えるのだ。

従って、その卓越した継承センスに我々は驚嘆の声を禁じ得ないのだ。

そして、何よりも、その表現の裏に隠された【師匠ジョルジョーネへの敬愛の念】が香る作品であることは疑いないだろう。